

## 記念講演「21世紀におけるロータリー」

講師 千 宗室



お茶人でございますので扇子を出させていただきます、ご挨拶を申し上げます。まず、この地区大会に際しまして、ただいま、秋元ガバナーからお招きを受けまして、私のお話をということをとってご所望いただきました。まことに光栄にいたるしだいでございます。ただいま、ご懇篤なご紹介をいただきまして、いたみ入っているしだいでございます。

この地区大会には、私の先輩で、また、尊敬する菅野多利雄ご夫妻が会長代理でおいでになっています。菅野元理事は私どもにとりまして、いろいろ平生からお教をちょうだいいたして



いる方であります。また、亡くなりました家内が奥様とも大変親しくさせていただきました。ご息が大変な音楽家でもいらっしゃいます。私の家内も音楽が好きでございました。先程の千葉県の少年少女の楽団の演奏なども、家内が一緒におりましたら、大変喜んだことだと思ひながら、聴きほれたしだいでございます。

実はこの間、京都で10月29日に西太平洋地区のポリオ撲滅に対する宣言を、厚生省、外務省、WHOが主催いたしました。そして我が地区である2650地区が、西太平洋地域のポリオ撲滅のために、大変貢献したということで共催の指名をちょうだいいたしました。それで、3日間、京都で

会合いたしました。そのとき、菅野元理事もお出ましをいただきまして、ご懇篤なご挨拶をいただいたときに、私は会長代理で今度2790地区の方へまいりますということをおっしゃっておりました。私は講演を頼まれておりますということで、また再会をさせていただいたしだいです。今日は丸山理事もお忙しい中を、また私の方の財団でいろいろご貢献ご指導いただいた田中作次ロータリー財団前コーディネーター、パストガバナー、皆さん方それぞれ大勢おそろいでございます。また、大先達でございます佐藤千尋翁が私の目の前に座っていらっしゃいますが、「不易流行」ということで昨日、講演されました。もっとも、「不易流行」という言葉は、千利休が用いました言葉です。私が昨日おりましたら、大変楽しみにお話を伺えたのですが、残念に思っております。また、いずれは何かに発表なさると思いますので、それを読ませていただきたいと思ひます。佐藤千尋パストガバナー

も、昔からの長いおつきあいです。この方はまた、美術に関しましては、大変造詣の深い方で、佐藤千尋美術館をお持ちです。私もぜひ伺いして、いろいろお話を伺いたいと思っております。今日はそういう得がたい方々、しかもいつも南部パストガバナーにはご夫妻そろっていろいろお世話になっております。今日もお出迎えいただいたりいろいろとご親切にさせていただいて、友情に心から感謝を申し上げるさせていただきます。

さて、多くのロータリアンの奥様、またロータリアンの方々がこうして第2日目を有意義にお過ごしになり、私も皆様方にお目にかかせていただいで、大変ありがたく思うございます。実は私もこちらへ昨日あたりから伺はずでしたが、香港で開催されるロータリー財団のセミナー、また香港の地区である第3ゾーンのB4、B6、B7という地域のインスティテュートに、ぜひ代理出席してほしいということで、国際ロータリーの方と財団の方の両方合わせて、代理を命ぜられまして、実は急に8日から香港へまいらなければならなくなりました。昨日遅く成田へ着きました。そういうしだい、今日は、ロータリーの21世紀における一つの歩みというようなことで、私が思っておりますことをお話し申し上げたいと思っております。

フランク・デブリン会長とも、私ども理事会、あるいはまた、財団のトラスティ会、それぞれでご一緒させていただきました。大変、示唆に富んだ本年度の英知のありますテーマ、私たちの心と



いうものをもう一度目覚めさせなければいけないということをおっしゃっているわけです。そういうことなどにつきまして、昨日、一昨日と香港におきましても、デブリン会長の代理で来られましたキング会長エレクトご夫妻、それから次年度の2002-2003年度の会長を務めますタイ国のピチャイ・ラタクル、また、パストプレジデントのフィリピンのマツ・カパラツさんといった方々が、お集まりになりまして会合したわけです。

非常に和気藹々ですが、その中でデブリンRI会長がおっしゃったことをお伝え申し上げたいと思います。

ロータリーというのは、見た目には非常にすばらしい会合のように見えるけれども、その中身を考えると、まだまだ完全なものではないということ、自分は日ごろから痛感している。それはどういうことであるか。ロータリーというのは、今から95年前にポール・ハリスが作られた、一つの目的を持って3人の方々が呼び集められ、ロータリーという組織ができた。ポール・ハリスもおそらく、今日、こんなにロータリーが国際的にすばらしい組織を持つようになるとは、考えもしなかったろうと、その当時は自分もそう思う。けれども、考えてみると、ロータリーというものが、なぜ今日ここまで発展してきたかということ、それはロータリアン一人一人の善意の心というものが、大きく輪になって広がってきたからである。寛容、慈愛、忍耐がその善意の中に含まれている。そういうものがあってこそ、初めてロータリーというものの存在感価値があったのである。そして今日まで、それが続いてきた。しかしながら、今日では本当にロータリアン一人一人が、善意という大きな心の中にある慈愛と忍耐と寛容というものを、はたしてどれだけ地域社会のために捧げられているかということを考えると、それは非常にある意味においては寂しい思いがする。なぜならば、ロータリーというものは、ロータリアン一人一人が自分の行動を通じて、その行動というのは大きな職業であり、その職業というのは天から与えられた

いわゆるボケーション・サービス (vocational service)、そういう天から与えられた自分の職業というものに大きな誇りをもって、そしてその職業を通じて自分のできる一つの、職場において、家庭において、地域社会においての奉仕ということがきめ細やかに、本当にできているのかどうかということ、もう一度反省する必要があるのではなからうか。

そういうことを言っておられたわけです。私はそういうことから、ふと自分自身が思いましたことは、今年のブエノスアイレスの国際大会の折に、私どもの方の財団の前委員長であります、前の国際ロータリーの会長でもありました、その会長が“Hope”という言葉が言われました。この“Hope”という言葉は私どもは考えてみなければならぬのではないかと、ロータリアン一人一人に訴えられたわけです。私はその“Hope”を思い出したわけです。この“Hope”というのは、どういうことであるかといいますと、いわゆる「H」は、私どもはロータリーに対しての誇りというものを絶えず持たなければいけない。だから、言うなれば“Honor The Rotary”、それに付随いたしますファウンデーションであるとか、あるいは一つの組織であるとか、そういうものが、その“Hope”の「H」というトップに私は来ると思っています。

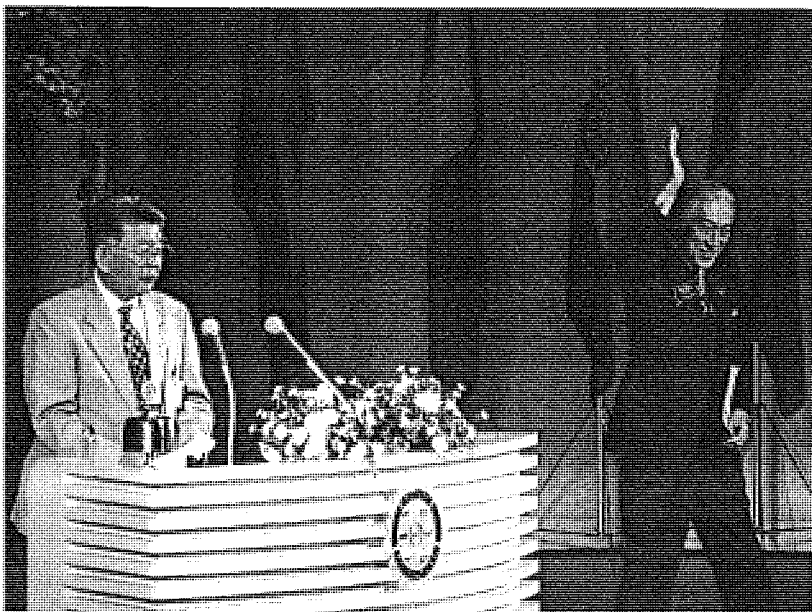
よくロータリー・インターナショナルとロータリー財団がどう違うのかという質問を受けます。たいてい一緒のように思っているかもしれませんが、これは一線があります。いわゆるロータリーという大きな組織というものは国際的な組織である。その両車輪が国際ロータリーの運営する機関、それから、資金援助をし、いろいろなプログラムを作って、それを遂行させていく、いわゆる行動プラン、そういうものがロータリー財団である。ですから、ロータリーというものに対して、ロータリー・インターナショナルという一つのオーガニゼーションというものが両車輪であるわけです。そして、大きなロータリーという組織が、



そこで動くわけですから、そのように考えていただきましたら、ロータリー・インターナショナルとロータリーファウンデーションというものがよくおわかりになるでしょう。表裏一体のものである。しかしながら、その実施要項については、もちろんロータリー・インターナショナルには理事会というものがありません。ロータリーファウンデーションの方には、委員会という組織がある。そういう理事会の運営というものによって、1クラブ、末端に至るまで、ロータリーのいろいろな行動意識というものが喚起されるわけです。

それからまた、いろいろロータリー財団に対しての理事会からの要望があります。こういうことに対して、こういうプログラムには資金援助をしてほしいというようなことです。ロータリー財団は皆様方から善意の寄付をいただくことにより、1998年、99年度の総収入予算を見ましても、約8000万ドルの寄付金をいただいています。そして、支出がそれに対して、7500万ドルぐらいです。ロータリー財団の内容というものはたくさんのプログラムを持っています。ですから、そういうプログラムの一つ一つを我々が地域社会、ひいては国家、また国際的に、だんだんとその輪を広げていくためには、なかなか7000万ドルぐらいの予算ではできません。そこで、国際ロータリーの方では、この2005年には国際ロータリーが100年という非常におめでたい年を迎えます。そのときまでに、2億ドルの基金をこしらえようということになりました。ですから、全世

界のメンバーお一人お一人が100ドル以上、ロータリー財団に寄付していただく。今、メンバーがだんだん減ってきております。約120万あったメンバーが大体今は、3万5000人ほど減っているわけです。これから21世紀に対してのロータリーの一つの展望としては、会員を増強しなければいけないということは確かな問題です。しかし、そ



それはそのようにはいかない。

来年度のキング会長エレクトが京都に来られました。京都に来たついでに、「あなたがコンピナーになって、現ガバナー、次年度のガバナーノミニ、そして地区の増強委員長、必要な増強に対する助言をしていただくバストガバナーの方々に、ぜひ集まってもらって、増強と退会防止についてのセミナーを1日やりたい」ということをおっしゃってこられました。そのときにアプリン会長は、何とかして会員を増やさなければいけないと。一人が一人を紹介すれば、大きな数になる。一人が一人、ぜひ会員を紹介してほしいと。

そこで、いろいろ皆さん方の討議がありましたが、考えますと、ロータリーというのは職業分類というものが非常にはっきりしています。よく、「We serve, I serve」ということで議論します。

我々は、考えますと、ロータリークラブとい

うもののメンバーでありますから、ロータリークラブの中にいる以上、10人でも20人でも100人でも200人でも、ロータリークラブという一つのクラブがそれで成り立っているわけですから、そのメンバーを主としてそのクラブがいろいろな奉仕活動をするということは、確かに「We serve」です。ところが、ロータリーというものは四大奉仕部門というものが決まっています。その中でも一番大事な部門は、私たちは職業分類というものがあって、ロータリーのメンバーになっているわけです。職業分類がどうでもいいというのでは、ロータリーというものは成り立ちません。それぞれの職業分類というものがあからこそ、その職業を代表してそのクラブのメンバーになっているということが一番大切なことです。

私どもはそういう意味において、ロータリアンになったときに、初めてこのピンを付けさせていただいたときに、「あっ、ロータリアンになったのだ」と。そこにロータリーに対する誇りというものを自分自身が持つのですが、それはそのときに自分の職業に対して誇りを裏付けてくれるということを実感するということが非常に大事な哲学だろうと思うのです。自分の職業に対して、ロータリーというものが認めてくれ、そしてその代表としてそのクラブに入らせていただいた。それは自分個人、インジェネラルなものだと。そして、その自分の個人がその職業分類を通じて、自分の職業を通じて、今まで自分が考えられなかった一つの奉仕というものをそこでさせていただくということ、そういう哲学に自分が徹したときに、初めて「I serve」という一つの大きな行動になっていくのです。

私たちが仮に、ロータリーに入る前の自分とロータリーに入ってから自分というものを採点したらどうでしょうか。何点ぐらいでしょうか。私も

ロータリーにメンバーとして40年の在籍期間を持っていますが、自分が本当に自分の職業というものを通じて、自分がロータリーという意識のうえに立って、地域社会のために、あるいは世界の平和のためにどれだけのことができるかということ、本当の意味において考えられたかどうかということ、自分を自分自身思うのです。

自分が「一番のお茶から平和」ということを自分自身が世に訴えていながら、それが実現、あるいは自分がそれを行動ができないということであったら、自分のターゲットである「一番から peacefulness」ということを裏切るということになります。ですから、私は青年会議所もロータリーもそれを支えてくれるということに信じて、実は今日までやってきたといっても過言ではないと思います。「一番から peacefulness」という大それたテーマを私がなぜ掲げたか。実は、この9月の14日に国連のミレニアムの総会で、「ぜひとも一番のお茶を平和ということで、世界中に広げているあなたにお献茶と平和を祈念するための茶会を国連で開いてもらえないか」と、昨年、アナン事務総長夫妻が私どもの方においでになってそういう話が出てきたのです。私はできましたら、それは大変ありがたいことだと、「はい、よろしゅうございます」と言ったものの、これはえらいことだと。これは自分の茶道という一つの道を通じての大きな使命感とものを、どのように具現していけばいいだろうかと、自分で大変苦しんだのです。

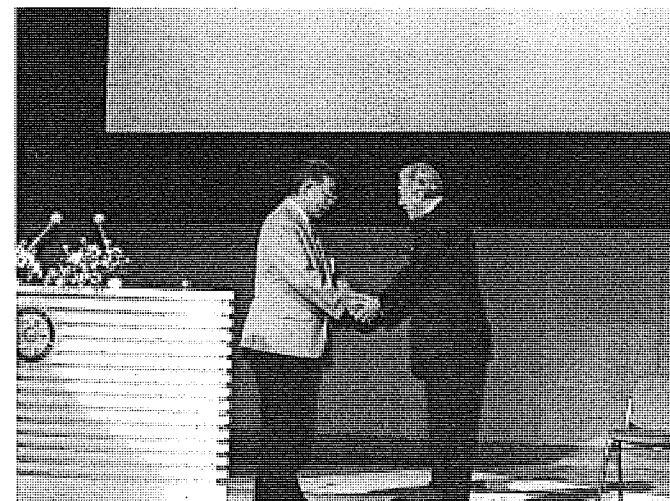
そのときに、自分がふと思ったのは、これはロータリーの「I serve, We serve」の、私が実践できる、体験できる一つの大きな機会ではなかろうかということです。国連の総会場の隣に north lounge delegate、いわゆる北の代表団が集まれる北の部屋というのがあります。それは非常に広い部屋です。8畳のお茶室をその真ん中へ持ってきます。もちろん、襖も障子もみんな外し、どこからでも見えるようにしてあります。そして、床の間が真ん中にあり、水屋

がその横にあります。

そこへ200人、原則としては180か国の代表団の団長、責任者、もしくはそれに伴う方々ということ、そしてスタッフの人たち、合わせて200人、もう限定です。その茶室の前にずっといすを並べました。一番のこの正客の座に座るのはフィンランドから出ていらっしゃる議長、いわゆる外務大臣夫妻、それからアナン事務総長夫妻というように、ずっとアメリカから順番に並べて、そしてあとずっと各国の方々が並べられます。

ちょうど時間がまわりまして、私がお挨拶やお茶の話のいろいろして、それから一番のお茶をちょうどこのお茶室の向かって右側のところに国連旗、そしてそこに台を置きまして、その横に大きく「一番から peacefulness」「One boil through of the peacefulness」というターゲットを掲げました。そして、壇上におかしを捧げました。私は定刻、河野外務大臣のご紹介でアナン事務総長のお話があり、お献茶を始めました。200人の方が本当に静かに、私の点前を見ていただきました。そして、その一番のお茶を無事にお捧げしたあと、今度は再び私がお点前をいただきまして、皆さん方の前でお茶を一服ずつ差し上げました。

ありがたいことに私も45年間世界各国を回りまして、あちらこちらでお茶が芽生えております。私もずいぶん奨学生として招いた、あるいは修業



いたしました人たちが各国にあります。なにしろ各国の方々ですから各国語でやらなければいけません。私が一番のお茶をフィンランドの議長さんとその奥様に差し上げたあと、両サイドから振り袖のお嬢さんも来ていただき、各国の皆さん方にも来ていただいて。そして、その各国の人たちがお茶を運んできて、皆さん方のところでいろいろ各国語でお茶を説明したのです。

無事に大盛会で終わりました、皆さんに大変喜んでいただきました。そのときに、その北朝鮮の代表団の皆さん方が韓国の代表団の団長とともに肩を並べて、少し遅れて来られたので前の方ではなかったのですが、後ろの方に腰掛けられて、そこで南と北の両方の代表団の方々がお茶をいただきかけていました。北朝鮮の代表団の方々は一歩も遅くはない。ですから、周囲のよその国の代表団の人たちがびびりして、北と南の人が仲良くしたと。もちろん、その前にはご承知の金正日さんと金大中さんとの握手があったわけですから、北と南の方がそうやってこられるのも、なんら不思議ではなかったわけです。しかし、その2人の方々がお茶を一緒に飲んでいられるという姿が本当にほほえましく、なんとも言えない一つの国連における和やかさというものを、雰囲気として皆さん方に与えたということは端然でした。

えてして、人間どうしが本当に心から融和して



いくこと、これは非常に大事なことです。北と南というのが今まで憎しみ合っていた。同じ民族でありながら、ああした思想上の問題で離ればなれ、別れ別れになってしまった。それが一体化になろうとするには、まだまだ時間がかかると思います。しかしながら、その一つの足がかりとして、いろいろところでそういう融和していけるステップというものできているということならば、私はそれは非常に大きなステップだと思うのです。そのステップがだんだんと作られていることによって、最後には完全な統一、お互いがアシュミレートするということになっていくのではなかろうか。そういうところに、私は「一番から peacefulness」という自分の職業を通じて、差し上げることができた喜び、誇り、そういうことが私は自分にとって、ロータリーという奉仕というものの精神の中にあります「I serve」と「We serve」というものが実現、実施することができたのではなかろうかと、自分自身そのようにおこがましくも言い含めたわけです。

そして、元に戻りますが「Hope」というものの中に、私は慈愛と寛容と忍耐というものがあるということを申しました。この慈愛と寛容と忍耐というものは、本当に私は大切だと思うのです。ロータリアンの世界中の一人一人が本当にこの心に徹していたならば、もっと財団に対するご協力も、それからまたクラブのロータリーの活動を通じて、地域社会にもっと親密なロータリーに対して理解をしてもらえるような行動体というものが出来上がってくるのではなかろうか。

そのためには、私どもは「Ho-pe」の全体的な考え方としてのあり方、「Honor The Rotary」、ロータリーに一つの誇りを持つと、そしてまた、次の方ですが、Oに対しましては「organize」、いわゆる一つの組織というもの、「organ」というのは人間の体の中の一つの器官、組織です。そういう一つの器官組織というものは、どこか一つでも悪くなれば人間の体の状態が調子が悪いということになります。やはり、そういうものを整えて

いかなければいけない。今のロータリーというのは、その一つの「organ」、いわゆる「organize」、この組織というものを考えてみて、はたして満足できるものであるかどうか。決して、満足できるものではないと思うのです。会員増強とか、会員が減るからもっとクラブを作れとか、いろいろな指示が国際ロータリーから出てまいります。しかし、いたずらに会員増強ばかりをしてはたしてロータリーの昔から言われている質的な内容を考えたときに、それはどうなるのだろうかという疑問が多く、ロータリアンはみんな持っておられるものだと思います。

しかしながら、これはそれぞれのクラブが努力されるということで解決ができると思うのです。私はロータリアンはクラブに属していると、そのクラブ自体がしっかりしているか、しっかりしていないかということによって、よきロータリアンを作ることができるかできないかということなのです。クラブというものの中に職業分類というものがあります。その分類表を見て、その分類のだれとのこれはないから、推薦してもらわなければいけないということを職業分類委員会で言われて、そして会員をぜひ推薦してくれということをおっしゃいます。それはそれでいいかもしれませんが。しかしながら、無理矢理に、職業分類がいろいろあるから、無理矢理に「ちょっと、おまえさん入れよ」と引っ張り込んで職業分類を埋めることをやっているクラブが多い。そういうことがいわゆる質の低下につながってくる。それよりも、私は職業分類はあとで作ってもいいと思っています。ロータリーの精神、ロータリーの奉仕ということに最もふさわしい人がいたならば、私はその人こそ職業分類を超えてロータリアンになっていただいているのではないかと考えます。そうしたときに初めて、クラブの意図、意識、そしてクラブ内の一つのレベルというものが上がってくると私は思います。

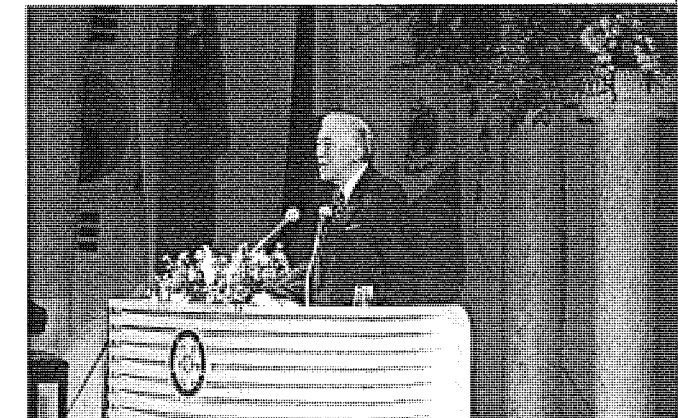
平素から、例えばボーイスカウトであるとか、ガールスカウトであるとか、あるいはいろいろな

社会的な奉仕活動に専念しているりっぱな人たちがおられると思います。しかし、その人の職業がなんだと討議したときに、これは職業分類が何だからダメだということで、我々よりも数十倍も喜んで奉仕させていただくという気持ちを持っているそういう人たちは逃している。そういう人たちは逃しているということが非常に多いのではないかと。ですから、そういう人を見つけて、そういう人にロータリアンになっていただいて、私は初めてロータリーの質的な内容というものが向上していく一つの兆しというものを与えられるのではなかろうかと思えます。

1975年ですから、今から25年も前の話です。私がガバナーになりまして、ガバナーノミニーとして、私の年度の前までは皆レクプレッショントころで研修があったわけです。

そのときに、10日間のガバナーノミニーとしてのいろいろな訓練がありました。1日だけ、日曜日がお休みでした。そのお休みがあったときに、私はたまたま家内とホテルに頼んでホテルのリムジンを雇います。そのリムジンでボカラトーンの周辺の観光をしました。

車に乗って少し走ったときに、その運転手が、運転手といえどもオーナーだったのです。自分がキャデラックのリムジンを2台持って、そしてこのような観光案内をしているのです。なかなか風采もりっぱな人でした。その運転手が「あなた方はロータリアンか」と言うから、「そうです。



ロータリーのガバナーで研修に来ている」と言ったら、「大変だね」と言ってしばらく話していました。ふと、その人が「実は、私はこういう車を持って商売をしているけれども、今、ロータリーに入れと言われている。実は自分もロータリーというのは非常に魅力がある。なぜならば、自分の職業について自分がロータリアンになったときに大きな誇り（プライド）を持つことができる。そういう、職業意識を高めてもらえるというトレーニングをもらえるならば、自分たちは神の思召しのもとにサービスをするということが、大変自分たちにとってありがたい」と。ということは、日本人の奉仕・サービスというのは、外国の方々、特にアメリカの人たちのサービス・奉仕という気持ちと違うのです。我々は仏教の国です。もちろん、神道です。また、クリスチャンの方もいらっしゃると思います。クリスチャンの方々の考え方は別として、大半が仏教の人たちです。そうすると、我々は子どものときから奉仕ということについて、ボランティア、あるいは自分がディケイトするという、一つの献身的なという意味はなかなか教わりません。外国の人たちは一生懸命に6日間働き、そしてなにがしかのお金を自分が貯める。そのお金は何にするかという、日曜日に教会へ行って敬虔な祈りを捧げる。そのために自分はこれだけの働きをさせていただいた、ささやかでもこれを自分より恵まれない人たちのため

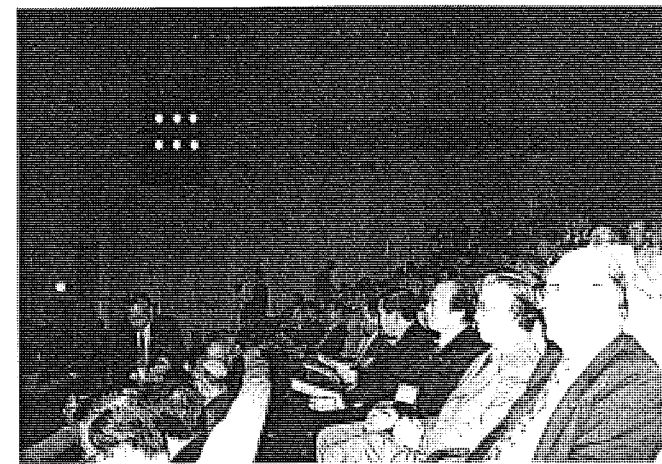


に献じさせていただきますということで、そのなにがしかを回ってくる基金集めのお盆の上に乗せます。これはカソリックでもプロテスタントでも皆一緒です。自分たちが一生懸命に働いた、その一部分を自分よりも貧しい人たち、気の毒な人たち、哀れな人たちのために、自分が施しをさせていただきます。そして、自分の時間があいているときには、気の毒な人たちのために、地域社会のために、何か奉仕をさせていただきますことができますることをということをお祈りします。

我々日本人はそういう気持ちというものは、なかなか自分自身で発露しようと思ってもできません。そして、ロータリーだとライオンズであるとか、青年会議所であるとか、ソロプチミストであるとか、そういう団体に入り初めて、我々は奉仕というものの意義をつかむことができるのではないのでしょうか。そして、奉仕という意識というものを持つことができるのではないのでしょうか。そういう奉仕というものに対する持ち方、そういう考え方の違い。その考え方の違いというものは私は心だと思えます。その心というものによって、自分がさせていただきます、ありがたいという気持ちと、してあげるのだという気持ちとは大変な違いです。外国の方々はこちらかという、してあげるということではなくて、させていただける、させていただきたいという気持ちです。教育改革の方についても、小淵さんから意見を述べよということで、私も私なりの意見を述べさせていただきました。それには先程、秋元さんがおっしゃったように、親と子の問題が一番大事だということ。親という字を考えてごらんください。木に立って見るという字が親という字です。親というものは大きな存在であるはずで、大きな存在であると同時に、いつも自分がその大木の意識ではなくて、大木というのは日陰にもなりますし、雨も防ぎ、風も防ぎます。自分の枝葉を取られても、大きく自分の木が根を張って、そして大地とともに、自然とともに、大きく寄生していくようにみんなを眺めます。

かつて、「ギビング・ストーリー」という子ども向けの絵本がアメリカではやりました。これは非常に大きな一本の木が、野原の真ん中に立っていて、その大きな木にいつもかわいらしい少年がやってきて「木さん、木さん、グッドモーニング。これから学校に行ってくるよ」と。帰ってきて、木さんは「あの坊やは大丈夫かな。あつ、帰ってきた」。「木さん、帰ってきたよ」と、いつもその木さんに抱きつきながら、その坊やは「僕も早くこんなに大きくなりたいな」と思っています。その木さんは「坊や、しっかり勉強しないさいよ」という心でいつも少年に接していました。だんだん、その坊やが大きくなりました。そして、やがてその青年となった坊やが「木さん、木さん、喜んで。僕は今度結婚することになった。だけれども、うちを買うお金がまだないんだ。なんとかしてうちを建てたい」と。それを聞いた木さんは「いいよ、坊や。坊やではない、もう、あなたは青年になったのだ。お嫁さんのために私の体の一部を切りなさい。私の木を持っていきなさい。必要なだけ持っていきなさい。そして、りっぱなうちを作るんだよ」と言いました。

青年は喜んで、その木を切らせてもらいました。そして、その青年はお嫁さんをもらって、そのうちに住みました。「よかったな、俺の体は半分ぐらい、あの青年の新しい家のためにやってしまったので寒々してきた」、しかしながら、木さんは依然としてそびえておりました。やがて、その青年もだんだん年を取ってきました。奥さんが亡くなってしまいました。木さんのところに来て「最愛の家内を亡くしてしまった。これからもう、どうしていいかわからないけど、自分はなんとか船を造って、行けるところまで行きたいと思う。木さん、あなたをくれますか」と、気の毒でかわいそうだなと「私の木を持っていっていいよ。全部持っていきなさい」「ありがとう」と言って年を取ったその人は木を切りました。根元から切りました。大きな木さんは、どさっと倒れました。そして、その年を取った坊やはその木を削って船を造りま



した。船を造って、その木さんの恩義に応じて、あちらこちらに寄港して、やっと帰ってきました。それは、自分はその木さんによって生かされ、木さんがすべてを自分にくれたのだと。そのために、自分はこうして今、家内を亡くしたけれども、生きて今、またここに帰ってきた。あの木さんに会いたい、木さんはどうしたのだろうということで、その木のもとへ走っていきました。もうそこには、木はありませんでした。切られた根株だけがありました。大きな根株だけがありました。はっと、その坊やである年取った老人は、そこで気がつきました。「ああ、木さんは全部、自分のためにくれたのだな。自分を全部犠牲にして、私の幸せのためになってくれたのだ」と、物語はそれで終わるのです。

私はその本を読んだときに、親というものはこういう親でなければいけないと。自分のすべてを犠牲にしてでも子どものために一生懸命に親が子を育てていくのは当然のことなのです。しかしながら、この当然のことが今、当然になっていないのです。このところに摩訶不思議な現象が起こってくるわけです。私は、今のビッグツリーこそ、親であり、そして私は巨大なるロータリーであると思うのです。皆さん、そう思いになりませんか。私たちはそういう巨大なロータリーの根元ではありませんけれども、根元はポール・ハリスです。そして、私たちはそのロータリーの中で育ってき

た一本の枝・葉であるかもしれません。

このビッグツリーのそうした気持ちというものを、私はもっともっと、親としての人間、人間としての親、そして私たちがその親の心というもの



はどのように子どもたちに移っていくか。また、子どもたちがその親の心をどのように反映していくか。そういうコンティニュイティというものを私たちが少なくとも作ってあげてあげなければならないのではないか。そういうことをすることによって、少しでもこの世の中、世界というものはもっと平和になり、美しいものになっていくと思うのです。

今、世の中の環境とかいろいろなことを言われます。自分の間尺に合った考え方で、地球を汚し、地球を破壊していこうとしています。英国の科学者のジェームス・ラブロックが「地球とは有機体だ。人間と同じように呼吸している。それを思いなさい。もっと地球を愛しなさい。人間はもっと地球に感謝をしなければいけないのではないか」と言われます。私たちロータリアンはいろいろなことに対して、敏感でなければいけません。ですからこそ、今の教育の問題にしても、そして環境問題にしても、私たちが勝手に環境を破壊して、あとで人から言われたときに、どうのこうのと弁解ばかりして言いつくろって。そして、あたかも自分が善人のような顔をしています。まことに私は、不可解なことがそこにあると思うのです。

私たちはもっと、お茶の一椀の中に盛り込まれ

た緑の色のように、すがすがしく、美しい、自分の住んでいる場所、そして、その場所からの環境を、りっぱな環境というものに残していくということが必要ではないか。21世紀のロータリーというものは、そういう意味において、組織といううえにおきましても、もっとみんなが一緒になって、真剣にそういう問題と取り組んでいかなければならないのではないか。“Hope”の“p”は“participation”です。要するに参加をする、みんながともに“all together”がいわゆる手と手を取り合っていくということです。私どもは歌います。「手と手を取り合って、手に手をつないで」と大きな声で、「輪になろうよ」と輪になっています。そのときだけです。もっと本当に、小さな輪でもいいから、その輪をどんどん、いい友の輪を作り上げていって、そしてその輪を大きくつなぎあっていたときに、初めてロータリーというものの奉仕の意義が世の中に伝わっていくのではなからうか。

今、一生懸命、ロータリーではいろいろな問題を暗中模索していると思います。暗中模索しているということは、ロータリーの発展意識というものがそこにあると思います。まだまだ、ロータリーは捨てたものではないということを思います。そして、そのためには、一人一人の方々がみんな自ら進んで参加をしていただく、参加する意識というもの、参加する気持ちを持っていただきたい。

釈尊が七つの施しということを言われました。私はよくこれをお話しします。仏の七施、この七つの施しというのは、まず一番最初に布施ということ。布施というのは、お坊さんたちが行脚しながら托鉢して、門先でいろいろなものをちょうだいしてくる。それをありがたく持って帰って、自分の仏様にお供えしてからお下がりをちょうだいする。人様からいただいた本当にありがたい志というものを、自分たちがいただく。差し上げる方も、どうぞ一緒に召し上がってくださいという気持ちで差し上げる。私はこれが本当の布施であると思います。その布施の次に、そういうことがで

きない人は、忙しいとか、いろいろな問題があると思います。その次には心、心施、心で施しをすることです。この心施、私どもは先程から申し上げます、寛容と慈愛と忍耐と。これがいわゆる心施であります。そうであらなければいけないのです。

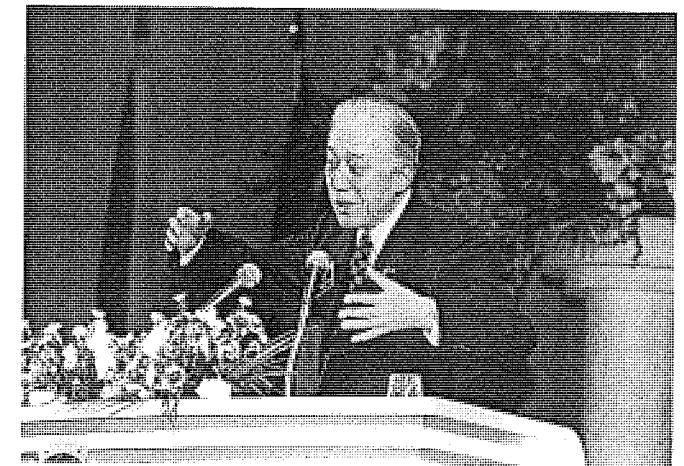
ロータリーへ出る毎週の1回、わずか1時間です。その1時間にロータリーへ行く前と、ロータリーが済んで、また職場に帰っていったときと、そのときの気持ちの持ち方です。ロータリーへ行く前はいらいらしている、しかし、ロータリーの例会に行くと、皆さん方の顔を見て、一緒に歌を歌って、お食事をいただいて、有意義なスピーチを伺って、そして例会場から自分の職場に帰っていったとき、行く前よりもロータリーに出て帰ってきたときに、本当に自分の気持ちがすがすがしい何か満ち足りたものになっているということであるならば、その方は真のロータリアンになっているということです。そういう気持ちを持って、私たちのクラブに奉仕をしなければいけないのです。いろいろな催し、こうした地区大会ももとよりです。

大体、2日目というのは、みんな1日目です。十分だということでお帰りになる方が多い。また、2日目はガバナーが本当に足止めをするためにいろいろなことをお考えになります。そのために、すばらしい内容がそこで起こるわけです。本当におもしろい現象です。私もこの2日目に伺ったおかげで、菅野先生と一緒に先程のすばらしい千葉県少年少女の管弦楽団の演奏を聞くことができました。本当にすばらしく、プラボーどころではなかったです。先程も菅野先生が私におっしゃいました「茶髪も金髪もないね」と。私はこれが本当に今日の講演の中で、「よし、いただいた」と思ったのはこの言葉なのです。

今は、茶髪も金髪もピアスもいます。いっぱいいます。私のせがれが若宗匠で、今、京都のロータリアンですが、芸術大学の教授をしています。これが講義だけではなくて、必ず単位でお茶の実習をします。この4月に新入生が24～25人のお

茶の実習に来るといいます。学校の作法室では少しさまにならないので、若宗匠が特別に茶道会館を使うということでバスに乗ってやってきます。私は好奇心で、どんなのがくるのだろうと見ていたら、まさしく芸術家の卵ですから茶髪も金髪もピアスもジーンズで、男か女かわからないようなのがぞろぞろとやってきました。そして、茶室でどたっと足を伸ばして「これはあげつない。ものになるのかいな」と実は思ったのです。そうしたら、それから毎週1回必ず皆やってくるのです。だんだん、その茶髪がきちんと座るようになります。金髪がお辞儀しているわけです。きちんとお辞儀ができるようになってくるのです。不思議なものです。

この7月にワンセメスターが終わって、茶髪がゆかたを着てやってくるのです。もちろん、本式の着物がなくて皆ゆかたということなのです。ゆかたで納涼茶会ということで、みんなきちんとお点前をしています。きちんと薄茶の平点前が4か月間でできるようになりました。それでみんなはお辞儀して、一番のお茶をいただきます。ピアスをつけた茶髪がやっているのです。私は驚きました、そして若宗匠に言いました「大変な効果だな」と、若宗匠は言いました「いや、今の若いのはきちんとしている。ただ、怖がってだれも教えないから野放図になってくる。教えたらしきちんとできるのです。初めは苦勞した」「そうだろうな」





と言ったのです。足を投げ出して、畳の上にひっくり返ったりぐらいしかできないものに、正座をさせるというのです。大変なことでした。しかし、それがきちんと正座してお辞儀ができるようになってきた。

私は何もお茶がそうだからといって宣伝するわけではありませんが、お茶であろうが何であろうが、教えてあげることが大事だと思います。それが私は教育の根元だと思うのです。「もう、あかんわ」と放り投げるのではなくて、どんな人にもそれを教えてやって、顔黒（ガングロ）であろうが何であろうが、とにかく教えてあげてこそ、初めてお辞儀ができて、そして一番のお茶も「いかがですか」と勧め合う気持ち、こういう優しい気持ちを育ててあげることができると。私は今の少女管弦楽団を見ていて、なるほどと思いました。英才教育かもしれない、しかしながら、こうして本当に菅野先生がおっしゃったように茶髪も金髪もない。そうした人たちが一生懸命に一つのものに打ち込んでいるという姿はすばらしいと思います。私は今の芸術大学の茶髪が一生懸命にやっている姿を見たら、やっぱり打ち込んでいるのです。自分の専攻科目が絵とか、土をこねるとか、いろいろあります。しかし、その連中が皆ちゃんと構えてお茶を一生懸命に点てられないのを点ているのです。それは外国人よりひどいです。はっきりいうと、外国人の方がまだま

しです。しかし、今の若い者はそうだからといって放つたらいけません。やはり、そこで教えてあげる。

先程も言ったように、ロータリアンはビッグツリーになってもらいたい。ビッグツリーに一人一人がならなければいけないのです。そして、自分たちの枝葉でもなんでもいい、切ってでもいい、それを若い人たちに与えていってあげることができてこそ、ロータリーというものが21世紀に生き残っていく一つの大きな足がかりになっていくのではないのでしょうか。私はそういう意味で、ロータリアン一人一人がパティスペートしていただきたい。いろいろなことにパティスペートすると同時に、いろいろなことに小さなグループでもいいから、そういう少年少女、青年たちのために、いい面の輪を作っていくことができたなら私は思うのです。

私はそういうことでの、いわゆるパティスペートをぜひお願いしたいと思います。

例えば、Exchange Student、いわゆるロータリアンの選考によって海外へ行く学生たち、そういう人たちに確かに語学という試験は大切です。語学ができるということほど、結構なことはありませんが、私は語学よりもまず、日本の伝統的なものを身につけているという人たちが、一人でも多くロータリーの財団の奨学生として行ってもらいたいと思います。何も語学だけの試験で100点満点をつけて、これがよろしいと出すのではなくて、必ず質問してほしいと。お茶とか、踊りとか、花とか、日本のお料理とか、あるいは日本の着物を着るとか、そういうことができるかどうか。そういう日本の生活文化というものを身につけた人こそ、私は向こうに行って初めて大きな交流ができると思います。それこそ、財団奨学生の大きな目的に沿うものであると思います。

語学ができて、日本の生活文化が一切身につけていない者が行って、そしてホームステイして、結局帰ってくる時に、「あなたは何もあなたの国のことを、私どもに教えてくれなかった」と、その

ホームステイのお母さんから言われたと。急きよ、私の方へ来て、これからお稽古をしたいと言う財団奨学生も男女ともにおります。ですから、そういうことを考えてみると、いかに今の日本人が外国語、あるいは外国のことばかりを先入的に、意識的に思って、日本のことはどうでもいいと。どうでもいいことではありませんけれども、むしろないがしろにしているということは悲しいことです。もっと日本のことを自分で身につけることこそ、私は真の国際人になっていくのではないかと思います。そういう人が増えてこそ初めて、多くのロータリーの後継者というものができるとはいいか。私はそのように思います。

ですから、皆様方、ロータリーの一つの夢として、最後に私が申し上げたいのは“Hope”の“E”です。エンジョイ。私が理事のときに、このエンジョイ、ロータリーというターゲットをヒュー・アーチャー会長が明示されました。よく勘違いされて、ロータリーはそんな難しいことを言わなくてもいいのではないかと、エンジョイしたらいいのではないかと。確かにそうかもしれません。難しいことばかり言うのではなくて、エンジョイしたらいいのですが、しかし、一つの組織というものの中には、規律、規定、すべてがあります。その規律、規定というものがあってこそ初めて、ロータリーという枠の中で人間形成、人間感性というも

のを養っていくことができるのではなからうか。どうでもいい、ただ楽しんでいればいいということであるならば、これはロータリーでなくても、ほかのところでもできると思います。ロータリーは奉仕というものに対して、エンジョイしていただく。奉仕というものの真の哲学を身につけるために、エンジョイしていただくというものであるということを申し上げまして、私のお話を終わらせていただきます。

#### 千 宗室氏プロフィール

生年月日 1923年4月19日  
 学歴 中国南開大学哲学博士  
 (国務院)  
 職業 千利休居士15代茶道裏千家今日庵家元  
 日本国際連合協会京都本部本部長  
 表彰 1997年 文化勲章受賞  
 国際ロータリー関係  
 京都ロータリークラブ会長  
 国際第2650地区ガバナー  
 国際ロータリー理事  
 国際大会国内委員長

